

「安心してくらすために」

鹿児島県 鹿児島市立紫原小学校 6年 ^{よしとみ}吉富 ^{なおたろう}直太郎

6月の梅雨のある日曜日のことだ。その日は、朝から激しい雨が降り続いていた。すると不意に「ドーン」というものすごい音と地響きがあった。ぼくは、「近くに雷が落ちた」と思った。すさまじい音が聞こえてから10分程たってから、ぼくの家近くの消防車が来た。消防士があわただしく動く様子を見て、父は家の外に走り出た。「何事だろう」と、窓から外を見ると、父が消防士と話をしていて、その後、父の話から近くのがけが崩れたことを知った。このがけ崩れで、がけ下にあるマンションまで土砂が流れ込み、レスキュー隊が出動し、住人を無事に救助したそうである。幸いにもけがをした人は、いなかった。しかし、あと少しで大災害が起こりそうな状況で、再びがけ崩れが起こる可能性が高いようだった。ぼくは、恐ろしくて、たまらなかった。

その日は、消防局の指示で少し離れた祖父の家に避難することになった。避難準備をする間にも、再びがけが崩れてくるのではないかと、不安と早く避難しなければという思いで、ぼくは何が何だか分からなくなっていた。

その後間もなく応急対策が施され、自分の家に帰ってきたが、雨が降るたびに崩れた日のことが思い出されて、安心して過ごすことができなかった。そのため、雨が降ると1階の台所から2階に料理を運び食事をしたり、祖父の家に自主避難をしたりと、以前とは違う生活になっていた。

応急対策は施されたが、なかなか本工事が始まらない。聞くところによると、昔からこの地域は、がけ崩れの可能性が高いと言われていて、ぼくの通う学校の校区危険マップにもものっていた。何度もがけ崩れを防止する工事を町内会から市や県にお願いをしてきたようだ。しかし、対策工事は行われてこなかった。

ぼくは、不思議に思って母に聞いてみた。すると母は、「がけ崩れを防止する工事を行うには、がけを削らなければいけない。削る場所には所有者がいて、土地を提供しなくてはならないのよ。削られると土地が狭くなり、土地の資産が減るので、みんなが納得してくれる訳ではないようなの。」

母は、とても困ったような表情で説明してくれた。

工事が遅れている理由は分かったが、がけの近くで不安で不自由な生活を送るぼくたちはどうなるのだろうか。

ところで、ぼくは近くにあるがけについてふと思いついたことがある。それは、5年生の学習で、鹿児島県のほとんどがシラスと呼ばれる土でおおわれていること。シラスは、火山から出されたものであること。白っぽい色で軽く、たくさん水を含むと崩れやすいというものだった。ぼくの家近くの崩れたがけもシラスだったのだ。

つまり、鹿児島県はシラスが多いのだから、がけ崩れの災害が発生する確率も高いと言える。早期の対策工事や防止工事が必要だ。

うれしいことに、ついに工事が始まった。工事現場には、「急傾斜地崩壊対策工事」と記され、急傾斜地法という法律に基づいて行われている工事であるということも看板に書かれていた。

ぼくたちは、この街が大好きだし、これからも家族が暮らし続けていくであろう。現在も、役所のみなさんや工事の関係者のおかげで、このがけ崩れを復旧している。いずれは災害の起こりにくい、安心して暮らせる街になるだろう。

ぼくの家近くの工事も進んでいる。一日一日安心感が高まっていくような気がする。